

CA1
EA947
B71
#11 Apr. 1977
DOCS




1977年4月
No.11



- トピックス——2
- レベック首相、カナダとの共同市場を提案——2
- トルドー首相が訪米——3
- 隣り同士の国——カナダとアメリカ——4~5
- 9000キロの米加国境——6
- カナダの貿易収支、黒字に一転——7
- もっと原子力発電に力を——7
- トピックス——8

Bulletin Canada

発行  カナダ大使館

寒波の米国に緊急輸出 石油製品、天然ガスなど

カナダ・エネルギー庁は、記録的な寒波で燃料不足におちいった米国に対し、一月中旬から二月初めにかけて天然ガス二百三十七億立方フィート、石油製品百五十六万五千バレル、プロパン三百七十八万九千バレルの緊急輸出を認可した。

まず、一月十九日には、ミシガン州デトロイトのデトロイト・エジソン社へ燃料用重油五万バレル、オハイオ州、ニューヨーク州、首都ワシントンなどの広い地域をサービス・エリアとしているコロロンビア・ガス・システムに天然ガス百五十億バレルを供給することになった。一月二十一日には、ニューヨーク市のアジアティック・オイル社に対する半留油二十一万バレルの輸出、二十六日にはさらに十七万バレルの輸出が許可された。また同二十八日には、ペンシルバニア州のコロンビア・ガス会社へLPG（液化ガス）二百四十万米ガロン、ユタ州ソールト・レイク市のノースウエスト・パイプライン社へ天然ガス一日当たり五千万立方フィートなどの輸送が認可された。そのほか、二月に入って、ノースウエスト・パイプライン社へ天然ガス十二億立方フィート、ナイヤガラ・モーター発電会社へ十三億バレル、モンタナ発電会社へ三十億バレル、ペンシルバニア州へ六億バレルの緊急輸出が認可されている。

二十人に一人がアメリカ人 昨年の海外からの訪問者

昨年カナダを訪問したアメリカ人は、一昨年より六・八パーセント減

の三千二百二十万人にとどまった。これは、アメリカ人の大半が、建国二百周年を迎えて国外に出なかったことが一因と思われる。アメリカ以外からの入国者は、モントリオール・オリンピックもあって、一昨年より一八・八パーセント増の百六十万人に達した。それでも、海外からの訪問者はアメリカ人が二十人に一人と、圧倒的に多い。

ワシントンでカナダ文化討論会 美術品や実験映画なども紹介

米国の首都ワシントンで、カナダの文学、演劇、映画、ラジオ、テレビ、出版および視覚芸術に関するパネル討論会・講演会が開かれた。カナダから批評家のノースロップ・フライ氏、アンドレ・フォルナエ文化省次官、作家のロバートソン・テイビーズ氏、ジャーナリストのロバート・フルフォード氏などが参加し、実験映画やアニメ映画、カナダの芸術家に関する一連の映画、グループ・オブ・セブンの作品を含むカナダの美術品なども展示あるいは上映されたこのシンポジウムは、一月二十四日から四月六日まで続いた大々的なもので、米国のカナダ研究協会が主催し、カナダの人文科学基金が外務省文化局の協力を得て資金的に後援した。

米加、パイプライン協定に調印 両国間の石油・ガス輸送を円滑に

カナダと米国は、一月末、両国間の石油と天然ガスの輸送を支障なく行うための協定に調印した。これは、それぞれの領内を通過して石油または天然ガスを輸送するパイプラインについて、

非介入・非差別の制度を確認するもの。カナダ国内を通るアメリカの輸送管も、税制上、カナダの輸送管と同等の扱いを受けることになる。

現在、カナダでは、大量の天然ガスの埋蔵が発見された北極圏から、カナダおよび米国の消費地へこれを輸送するためのパイプライン建設が計画されている。また、推定二百六十六兆立方フィートの天然ガス埋蔵が確認されているアラスカから、カナダ国内を通って米国へパイプラインを建設する案もある。なお、昨年、州間パイプラインがモントリオールまで延長された結果、西部カナダから直接モントリオール市場へ石油が輸送されることになった（本紙昨年七月号）が、オタワ以東のカナダで消費される石油の大部分は米国メイン州ポートランドからパイプラインで、また天然ガスの大半も米国内を通るパイプラインで輸送されている。

囚人交換条約に調印

米加両国は、このほど、お互いの国に収容されている囚人を交換する条約に調印した。これは、それぞれの国で服役、仮釈放または執行猶予中の犯罪者（移民法もしくは軍法違反を除く）に関し、自国への移送を認めようというものの。議会の承認をへて正式に発効するが、実施されれば「画期的なものであり、他の国々との同様な条約の手本になる」（フランシス・フォックス検察庁長官）ものと期待されている。現在、米国の刑務所で服役しているカナダ人は九十人、カナダで服役しているアメリカ人は百七十四人。

レベック首相、「共同市場」を提案 「ケベックの独立は不可避」

ケベック州のレベック首相は、一月末、ニューヨーク経済クラブで講演、ケベックの独立は不可避であり、五年以内に州民投票を行って決定する、と述べた。

同首相は、ケベックには二百年前のアメリカにおける十三種民地と同じ独立の必然性があり、当時と状況も似ているとして、「ケベックとカナダに関心をもつすべての人々が問うべき重要な問題は、ケベックが独立するかどうか、あるいはいつ独立するか、ということではなく、時がきてケベックの人々がいかにして自らの政治問題を完全に担当できるようになるか、ということである」と語った。これについては、ケベックはこれまでも「静かな革命」を民主的に実施してきており、近い将来、徐々に「静かな独立」を達成していききたい、と述べた。

政治主権を徐々に、そして平和的に実



レベック首相

現するという計画とともに、レベック首相はカナダとの「経済連合」を提案した。こ

れは、ケベックは独立後もカナダと相互に依存しつつ、互恵的経済関係を続けたいというもので、同首相としては欧州経済共同体のような、共通関税、資本や労働の自由移動などを基盤とする共同市場的なものを構想している、としている。

表紙の写真 カナダと米国は兄弟のようだと言われる。太平洋沿岸から大西洋沿岸へ、そして太平洋沿岸を北上して北極海へ伸びる九千キロ近くの国境をはさんで、二つの国民は牧場を、川を、山を、空を、そして家さえもわから合ってきた。本号は、トルドー首相の訪米を機会に、カナダと米国の「国境」を特集してみた。

トルドー首相が訪米 カナダの統一に確信

米国議会で演説する
トルドー首相(AP)

トルドー首相は、二月二十一日から二十三日にかけて米国を訪問し、カーター新大統領と会談したほか、カナダの首相としては初めて米国議会で演説した。カーター大統領との会談では、世界経済、核物資や核装置などに関する安全保障（セイフガード）、軍縮、人権問題などの国際問題、アラスカからカナダを経由する米国本土へのガス輸送管、米加間の投資および貿易、自動車協定、海城および漁業水域の設定などの二国間問題について意見を交換した。

また米国議会の合同会議で行った演説では、カナダと米国の特別な信頼関係、少数民族の保護や文化的多様性、あるいは順応の必要性などにおいて果たした米国の役割や指導性などを高く評価したあと、ケベックの独立運動とカナダの統一問題を中心に、カナダ政府の考え方を述べた。以下、同演説からの抜粋——。

（米加）両国の友好はきわめて基本的なもので、長い間他の諸国から進んだ国際関係の手本とされてきた。カナダのいかなる指導者といえども、この友好を意

識的に弱めることは有権者が許さない。また、カナダのいかなる指導者も——もちろん私自身も——それを欲しない。端的にいつて、何百万ものカナダ人およびアメリカ人が、一世紀以上もお互いを知り合い、好き合ひ、そして信じ合っ

てきたことを、われわれの歴史は記録している。

カナダ人は米国から孤立して暮らすことはできないし、そうしたいとも思わない。われわれは米国から刺激を受け、米国の活力から恩恵を受けてきた。

米国は、その歴史を通じて、驚くべき先見性を発揮した数多くの有能な指導者に恵まれてきた。ジョージ・ワシントン「の次の言葉は想起するに値しよう——」諸君の国家的団結が諸君の集合的および個人的幸福にとっていかに大切であるかを正しく判断することは、きわめて重要である」

われわれは、男性も女性も、人類にとって唯一の希望は肌の色や文化や信条の異なるいろいろな人々が平和に共存しようという自発心である、という知識から逃れることはできない。そういうときにあつて、米国はワシントンがたてた高い基準を忘れず、少数民族の保護や、多様性の豊かさや、融和の必要性に対する信念をうたっている。

自由、あるいは幸福の追求というものは、アメリカ人にとって理論的観念ではなく、捕えがたい目標とも考えられていない。米国はそのひとつひとつを力強く求め、自由の産物である喜びと創造力をすべての人類と分かち合つてきた。

十七世紀にさかのぼる根をもつ国内的緊張に直面するカナダは、米国が現世代において人種的緊張を緩和し、法的権利を拡大し、国民すべてに機会を与えるに際してみせた知恵、規律、そして忍耐から、学ぶべきことが多い。

連邦が結成されてから百年間における（自由で平等な国家を建設するという）わ

れわれの努力は、まだ完全には実を結んでいない。われわれは個人的自由と人権尊重の社会を創設し、また米国に近い経済生活水準を達成した。しかしながら、フランス系カナダ人が完全に平等で、自分たちが継承した豊かな文化を発展させることができるという状況は、今だにできていない。今日のわれわれの中心的問題の根源はここにある。ケベック州民の一部がカナダを脱退して、自分たちの国を作るべきだと考えるのは、このためである。新しく選ばれたケベック州政府はこの少数派の考え方を反映する政策をとっている。ただし、（政権をとった）ケベック党は、選挙運動では「健全な政府」を訴えたのであつて、「カナダからの分離」について付託を求めたわけではなかつた。

二つの活発な言語グループを融和させるというのは、色あいの違いはあれ、連邦成立以来、カナダ政府の一貫した政策である。その理由は明白だ。ケベックでは、人口の八割以上が第一言語または唯一の言語としてフランス語を話す。カナダ全体でいえば、フランス語だけしか話さない人が国民の五分の一近くを占める。こうして、代々、二言語、多文化の自由で平等な国が建設できるんだ、ということが信じられてきた。

私はこれが実現可能だと、確信している。私は、カナダの統一が挫折することはない、ときつぱりと、確信をもつて申し上げられる。

そのためには、いくつかの点でわれわれの態度を変える必要がある。つまり、言葉の壁を越えて、お互いをもつと理解し合わなければならぬ。英語系カナダ人もフランス語系カナダ人も、多様性の

もたらず豊かさをよりよく認識し、それによって起こる問題にあまりいらいらしないことである。六百五十万のフランス語系カナダ人が、カナダ連邦を二億二千万の英語系北アメリカ人（カナダと米国を含む）の中に埋没しないための最大の防壁だと見るようにするために、憲法を一部修正する必要がある。

一億二千万対六百五十万という数字自体、フランス系カナダ人の不安感を端的に現わしている。しかし、（ケベックが）分離したからといって、この実体は変わらない。むしろ、より明確になるだけだ。

さらに、ケベックの分離は、いかなる形においても、カナダ中に散在する数多くの文化的少数民族の自信を高めることにはならないだろう。これらの少数民族は、何十年にもわたつて、自分たちの文化やアイデンティティを保持するよう奨励されてきた。ケベックが突然離反すれば、われわれの複数民族国家の夢は破れ、文化的モザイクは破たんし、文化的少数民族を守るというカナダ人の決意を鈍らせることになるだろう。

これほど大きな問題に目をつぶるわけにはいかない。問題は、われわれがこれまでに作り上げた諸制度によって打開できる。これらの制度は、ケベック出身の私にも、また他州の国民同胞にも等しく所属する。これらの制度は民主的に構成され、そしてそのメンバーは自由に選ばれており、国民の意志に応じていろいろな変更を加えることは可能である。

カナダは、偏見と恐怖のない、理解と寛容に満ち、個性と美を尊重し、変化と革新に対して受容的な社会を形成しつつある、と私は確信している。

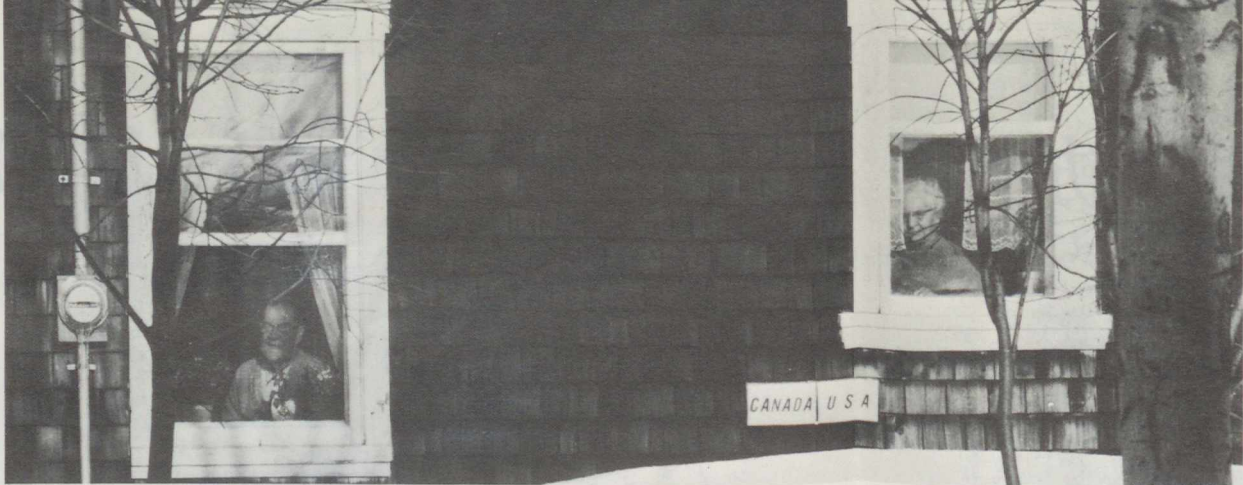
隣りの国—カナダとアメリカ

カナダは米国なしには考えられない。一つの大陸に同じヨーロッパ文化を受けついできた両国は、ほとんど運命共同体のような存在だ。歴史的背景、人口、経済力などの違いから、一方は兄、他方は弟のような関係になった。そしてそのことは、両国の間にきわめて親密な友情を醸成したが、一方で心理的な軋轢や政治・経済的問題も生み出すことになった。以下、両国関係についてのコメントを集めてみた。(★はカナダ人、★はアメリカ人を表わす)

「アメリカ人はわれわれの最大の親友だ——好むと好まざるとにかかわらず。」(ロバート・トンプソン 社会信用党党首、一九六七年)

「自然はカナダとアメリカ合衆国を隣り合わせにした。今やこの二国は友邦となるか敵になるしかない。両国は、お互いに無関心でいるにはあまりに近すぎ、あまりに多くの利害を分かち、あまりに多くの同種の抱負をもっているからである。」(ジョセフ・アドルフ・シャプロ、一九九一年)

「米国が存在することだけで与えているカナダに対する絶え間ない圧力を、米国民は決して過小評価すべきでない。われわれはあなたと違う国民である。われわれがあなたと違うのは、あなたがたのおかけでもある。あなたがたは、あなたがたのおかけでもある。あなたがたは、あなたがたのおかけでもある。」



「あなたがたの領内を通り、われわれの河川はあなたがたの領内を通る。」(ウィルフリッド・ローリエ首相、一九九一年)

「カナダは、イギリスの文化、フランスの文化、それに米国の科学技術をもってきたかも知れなかったのだが、結果的には、イギリスの科学技術、フランスの政府、米国の文化をもつことになった。」(ジョン・ロバート・コロンボ、一九六五年)

たのお隣りに住むのは、象と同居することくらいか似ている。象がいくら親しくて、穏やかでも、びくびく動いたり、鼻を鳴らしたりするたびに、こちらまでひびいてしまう。(トルドー首相、ワシントン、ナショナル・プレス・クラブで、一九六九年)



「米国はわれわれの隣国で盟邦であるばかりか、友邦でさえある。」(トルドー首相がモスクワでブレジネフ・ソ連首相へ、一九七一年)

「(在米カナダ人は)折りにふれ、自分が外国にいるんだということを自覚する。私がこの問題に出くわしたとき考えたのは、私のその時の政治的党派がCCF(労働派、現在の新民民主党)だということだった。この二つは、どうしてもアメリカの状況にあてはめることができなかった。カナダ人の頭の中では、国境は現実性をもっているのに、アメリカ人にはその観念が全くない。カナダではアメリカを指すのに、国境の向こう側」というのに、アメリカ人がそういうのはついぞ聞いたことがない。アメリカ人による誤解の最大の根源は、

「われわれはフランス語や英語で夢を見るが、働いたり、楽しんだりするのはだんだんアメリカ語に依るようになった。」(ジュール・レジェー現総督、一九五七年)

「両国はとても近く、ロック・アイランドではカナダで髪を切ってもらったあと、場所を移動しないまま、アメリカで靴をみがいてもらえるほどだ。」(アンドレ・パトリ、一九六四年)



「あなたがたの小さな巨人」に會長オールド・ロジスキーン役として出演、アカデミー賞受賞候補に指名されたほか、ニューヨーク映画批評家賞を受賞した。北部バンクーバーで生まれ、木こり、荷役夫となったが、けがで引退、その後映画界に入った。」

「私は、これまでの人生の過程で、二つの異なった文化を経験した。私が生れた文化は大家族制であった。私の祖父の家は長さが八十フィート(約二十四メートル)もあった。それはスモーク・ハウス(注・本来は蒸製室のこと)と呼ばれ、入江のビーチわきに建っていた。祖父の息子たち全部と彼らの家族が、その大きな家に住んでいた。寝所は太藪(い)のむしろでわけられ、中央におかれた炉でみんなが料理した。こうした家の中では、部族全体が一緒に住み、助け合い、お互いの権利を尊重するようになる。」

両国が結局は同じで、カナダ人が別個の国民になるほど歴史的・文化的発展に大きな違いがあったわけではない、と臆断していることにあるようだ。

「両国には侵略性にリズムの相違がある。アメリカ史には侵略的暴力がふんだんにあったのに対し、カナダ史における暴力はフランス領カナダに対する軍事制圧や西部警察(によるインディアン制圧)など、上からなされたものであった。カナダでは不満分子の除去という形をとるということは全くなく、インディアン戦争のようなできごと回避できた。」

「私は、これまで、カナダは世界に残されている唯一の本当の植民地だ、とたびたび言ってきた。カナダは、今やアメリカの植民地なのだ。」

「カナダをアイロニーの国だとする捉え方——例えば、マーガレット・アトウッドの敗者を英雄視する考え方——は、カナダ文学のひとつの特質を表わすもので、一考に値すると私は思う。マッケンジー・キングは敗者ではあったが、この国をまとめていく

私の文化があなたがたの文化に教えるものは、残念ながらあまりない。ただ、私の文化は友情と親交を大事にした。プライベートをそれほど固執すべきものとも思わなかった——プライベートは壁を作るし、壁は不信を育てるから。」

「両国民は北アメリカ人だ。われわれは、われわれの地理の申し子であり、同じ希望、信念、夢の産物である。」(ジョン・デイフェンベーカー首相、一九五八年)

「アメリカ人は、場合によっては、自分をそう呼ぶのを注意すべきだ。全大陸の名前を私していると思われかねないからだ。カナダ人もアメリカ人と同じく北アメリカ人である。しかし、アメリカ人が自分をアメリカ人と呼ばないならば、カナダ人がそう呼ぶだろう。誰も彼を合衆国人とは呼ばないだろう。」(エバレット・C・ヒューズ)

「カナダというのを聞いて、それはどこかの山の中にあるのだろう、と思った。」(マリリン・モンロー、一九五二年)

「アメリカ合衆国との繋がりがから逃れることはできない。カナダ人がどう感じたかは中国人」

「カナダのほとんどの産業はアメリカの産業の子会社で、したがって労働者の大部分は実際にはアメリカの従業員ではないか、と私は思う。カナダにある精油所で働くのと、ルイジアナ州パトン・ルージュにある精油所で働くのでは、それほど大きな違いがあるとは思われない。しかし、昇進するにつれて、本当の命令はどこかよそからくるのだということに気づき、やり切れなくなるときがある」

「カナダと米国の国境は、典型的な人的創造物だ。物質的には目に見えないし、地理的には非論理的、軍事的には防衛不可能、そして感情的には不可避的だ。」(ヒュー・L・キンリーサイド、一九二九年)

「カナダはシヤム双生児のように、物理的に米国と結びついている。双生児の一人が負傷すれば、他方も苦しむ。シヤム双生児を切り離して、生存を期待することが不可能であるのと同じように、カナダの防衛を米国のそれから切り離すことはできない。」(チャールズ・フォルクス 参謀会議議長、一九六一年)

「アメリカ合衆国は、オンタリオ州に対するほど、ケベック州に関心を払っていないと思う。しかし、ケベックの人たち

ついでいようと、それは非現実的だ。農業を基盤とするアメリカ合衆国は世界最強だ。それは否定できない。世界中の経済界がアメリカで起ることに影響される。しかし、支配ということばは使いたくない。輸出に大きく依存している国として、現実には認めなければいけない、と私は思う。もし、全く新しいカナダ主義をはじめるとしたら、われわれはどのていど生活水準を落とすともいいと思うだろうか。」

「われわれは過去からの共通の価値を、現在の共同防衛を、また将来への共通の願いを、そしてもちろん、人類の将来を分かち合っている。」

地理はわれわれを隣人にした。歴史はわれわれを友人とした。経済はわれわれをパートナーとした。そして、必要はわれわれを同盟者とした。自然がこうして結びつけた者たちを、何人にも切り離させてはならない。」(ジョン・F・ケネディ 米大統領、一九六一年)

「たったひとつの砦や大砲にも守られない、この三千九百八十六・八マイルのカナダ・米国国境は、世界で最も友好的で、最も目に見えない国際境界線だ。毎日、何千という旅行者がここを渡るが、通行中、その存在に気付くこともほとんどない。国境は心地よい賛辞を浴びるナイヤガラに洗われ、とどまることのない外交的対話で浮きばりにされ、あるいはときによつては、あいまいにされてしまう。国境は、どちらの側でも、何人たりとも変更することを考えない、ほとんど神の行為に近い絶対的事実として受け取られている。」(ブルース・ハチソン、一九六六年)

「アメリカ合衆国との繋がりがから逃れることはできない。カナダ人がどう感じたかは中国人」

9000キロの米加国境

一連の交渉、条約で確立

米国とカナダの国境は、湖や陸地を横切り、河川や入江に沿って、延々八千八百九十キロ（陸上五千六十キロ、水上三千八百三十キロ）に及ぶ。これは赤道円周のおよそ四分の一にあたる。陸地では、幅約七メートルの細長い回廊状の国境地帯が、山を越え、谷をわたり、大草原を横切り、森林をぬって蛇行する。この回廊には点々と標識が並んでいて、一目瞭然だ。見張りはほとんどいない。

大西洋のファンディ湾から太平洋のジョージア、ファン・デ・フカ両海峡へ及び、そして太平洋沿岸をデイクソン・エントランスからセント・イライアス山へ北上し、さらにそこから百四十一度の経線に沿って北極海へと続く米加国境線は、百二十五年にわたる一連の交渉、仲裁、条約をへて、二十世紀初頭、最終的に確立されたものである。

南の国境線は、三つの主な条約によって決定された。すなわち、一七八三年のベルサイユ条約、一八一八年の協約、一八四六年のオレゴン条約である。アラスカとカナダの境



界は、一八二五年の英国、ロシア間の条約、およびその後の米加協定の対象となった。しかし、これらの条約や協約の条項を実際に適用するにあたって、多くの問題が生じたため、さらに十三の条約、協定、外交文書の交換を余儀なくされた。

米国独立戦争を終結させた一七八三年条約は、大西洋からレイク・オブ・ザ・ウッズにいたるまでの国境線をごく大ざっぱに定めているが、双方の満足を得る結果に達するまでには、さらに三つの条約（一七九四年、一八一四年、および一八四二年）を必要とした。

一八一八年の協約は、レイク・オブ・ザ・ウッズからロッキーマウンテンまでの国境を、四十九度線にそって確立した。一八四六年のオレゴン条約はこの緯度線沿いに、国境線をロッキーマウンテンからジョージア海峡まで延ばし、さらに大陸とバンクーバー島の間の海峡を通過して太平洋まで結ぶことになった。しかし、その水域にある諸島の所有権をめぐる紛争が生じたため、問題はドイツ皇帝の仲裁に付された。一八七三年、同皇帝はヘアロ、ファン・デ・フカ両海峡にそって国境線を設ける決定を下した。

一八六七年、米国はロシアからアラスカを買収、これを機に、英国とロシアが一八二五年に結んでいた協定が明るみに出た。領地買収にあたり、米国は事実上この協定にしばられることになった。当時は、まだ国境の問題など大して急を要することではなかったが、その後、ゴールド・ラッシュが始まるにおよび、国境線の確立が不可欠となった。話し合いがつかないまま、国境は一九〇三年、仲裁によって決定され、一九〇六年、標識設



置作業が始まった。

実際の地取り、および国境線の維持は、国際国境委員会の責任に属する。この委員会は一九〇八年、両国が樹木の繁茂で回廊は消え、標識もなくなったり、こわれたりという国境地帯の惨状に気付いて設置したものである。委員は少くとも年一回、オタワとワシントンに交互に集まって会議を開き、仕事の打ち合わせをする。両国は手分けして、国境線上の八千の標識ならびに一千の測地点を検査、修復する。この測地点によって陸上、水上を問わず、国境線上のあらゆる場所を正確につきとめることができる。維持という観点から委員会の役員が最も頭を悩ましているのは、二千七百七十二キロの森林地帯だ。回廊がかくれないよう、樹木の

成長繁茂に対処しなければならず、一方生態環境の保全も欠かせない。この目的のため、委員会は数年来、国境線上に葉をまいて樹木伐採をしなくてもすむようにしている。定期的な立木伐採の費用に比べ、安上がりで、邪魔なものをなくし、保全の必要ある植物群の改良に役立つ。

国際国境委員会は、税関の機構とも緊密な関係を保っている。たとえば、税関の機能発揮の妨げとなり得る建造工事が、国境線のすぐ近くで行われるのを禁じるために、乗り出してくることもある。国境線にそって、百四十の税関出張所がある。あまり一般に知られていないものもあるが、ナイアガラ瀑布の出張所などは、毎年何百万という観光客で賑わう。

六億ドルの黒字に 昨年の貿易収支

	米国	英国	その他の EC諸国	その他の OECD諸国	日本	総額
1965	6,045	619	514	300	230	8,633
1966	7,204	673	583	232	253	10,072
1967	7,951	649	597	269	305	10,872
1968	9,048	696	662	289	360	12,358
1969	10,243	791	787	346	496	14,130
1970	9,917	738	815	406	582	13,952
1971	10,951	837	935	423	803	15,618
1972	12,878	950	1,149	528	1,071	18,668
1973	16,502	1,005	1,476	630	1,020	23,325
1974	21,357	1,126	1,920	802	1,430	31,692
1975	23,559	1,222	2,074	885	1,205	34,635
1976	25,661	1,153	2,028		1,524	37,391

	米国	英国	その他の EC諸国	その他の OECD諸国	日本	総額
1965	5,033	1,185	636	241	317	8,767
1966	6,235	1,132	645	280	395	10,325
1967	7,332	1,178	689	246	574	11,420
1968	9,230	1,226	762	289	608	13,624
1969	10,551	1,113	855	318	626	14,871
1970	10,900	1,501	1,206	445	813	16,820
1971	12,025	1,395	1,109	445	831	17,818
1972	13,974	1,385	1,144	463	965	20,150
1973	17,129	1,604	1,581	544	1,814	25,421
1974	21,400	1,929	2,175	788	2,231	32,441
1975	21,653	1,789	2,347	637	2,122	33,104
1976	25,783	1,848	2,647		2,391	38,028

カナダ統計局によると、昨年のカナダの貿易額は輸出を中心に大幅に伸び、往復で七百五十四億一千九百万ドルに達した。これは一九七五年の六百六十七億三千九百万ドルを七十六億余ドルも上回る。貿易収支も、七五年の十五億三千七百万ドルにのぼる赤字から、一転して六億三千七百万ドルの黒字となった。また昨年三十三億二千七百万ドル(往復)と前年より三億万余ドルも落ち込んだ対日貿易も、三十九億一千五百万ドルと大幅に増えた。

まず、昨年の輸出総額は三百八十億二千八百百万ドルで、前年の三百三十一億四百万ドルより一四・八パーセント増加した。これは、原油(前年比七億六千五百万ドル減)、石油関連製品、小麦などの輸出が減少した反面、天然ガス(前年比五億二千五百万ドル増)、木材(同四億六千五百万ドル増)、新聞紙(二億三千五百万ドル増)などの輸出が好調だった

ためである。

国別では、米国への輸出が前年の二百十六億五千三百万ドルから一九パーセント増の二百五十七億八千三百万ドルに達し、全輸出額の六七・八パーセント(七五年は六五・四パーセント)を占めた。対米輸出で最も大きく伸びたのは自動車および同部品で、前年に比べて十七億八千万ドルも増えた。

第二位の日本に対する輸出は二十三億九千万ドルで、前年より二億八千万ドル(二二・六パーセント)増。これは、小麦、大麦、石炭、木材、バルブなどの輸出が大きく伸びたことによる。

一方、輸入は総額で前年比七・九パーセント増の三百七十三億九千万ドル。自動車および同部品、化学品、機械類、消費財などの増加が目立った。

国別では、対米輸入が二百五十六億六千七百万ドルで、前年比八・九パーセントの伸び。輸入総額に占める対米輸入のシェアも、七五年の六八・〇パーセントから六八・六パーセントへ増加した。

七五年に前年比一五・六パーセントも落ちた対日輸入は、七六年に二一・四パーセントも伸びて十五億ドルを越えた。これは、主に、自動車、テレビ、通信機器などの輸入増による。

もつと原子力発電に力を

オンタリオ・ハイドロ総裁が強調

オンタリオ州は、一九八〇年代、一九九〇年代の中心的発電システムとして、経済性、安全性、生産性などの点できわめてすぐれているカナダのカンドウ型原子炉を活用すべきだ——カナダ・オンタリオ州の電力・水道公社オンタリオ・ハイドロのロバート・テイラー総裁は、このほど、将来の電力不足を避けるためには、原子力発電所をもつと建設すべきであると発言した。同総裁は原子力発電の効率だけでなく、環境問題や安全性などについてもふれている。以下は発言の要旨——。

の原子炉(それぞれ出力五十万キロワット)のうち、昨年は三基が稼働率九〇パーセントを越えた。一基は途中になってから稼働したが、それでも四基の平均稼働率は八七パーセントを記録した。因みに、北アメリカにある火力発電所の稼働率は七四パーセントであった。ピカリングの四基のうち、二基は世界各地にある同規模の原子炉六十七基のいずれよりもすぐれた実績を示した。

カナダの原子力発電所では、過去十五年間、人命にかかわる事故はいかなる原因であれ、一件も発生していない。放射性もしくはその他の原因で不具になった例もない。職員が職を離れなければならぬような放射能事故も全く発生していない。原子力発電所の近くや内部で、一般の人がケガをしたということもない。

コストについてはどうだろうか。ピカリングで達成されたエネルギー総単価はオンタリオ・ハイドロが運営する近代的火力発電所のエネルギー単価の半分にすぎない。

つまり、燃料(ウラン)も技術(カンドウ炉)もあり、また安全性、経済性も実証済みである。あとは原子力を利用する意志だけだ。一九八五年以後は、オンタリオの電力需要のうち、その三分の二を原子力でまかないたい、というのがオンタリオ・ハイドロの考えである。

オンタリオ州にとって、一九八〇年、一九九〇年に必要なだけの自己依存度を確保するための十分な電力需要を確保するには、原子力だけしか選択の道はない。これは、燃料の入手可能性と価格の点からだけでなく、環境への影響が少なく、また化石燃料をウラニウムでは達成できない諸目的のために保存できることから言えることである。われわれの裏庭にはウランがあり、実証済みの転換炉も手中にある。

カナダの原子力発電計画は、ひとつの成功物語であり、おそらくわが国の歴史の中で最大の技術的偉業といえよう。カンドウ型原子炉は、今や、すばらしい実績を取った先駆者的存在である。

例えば、ピカリング発電所にある四基

